
お婆ちゃんの自転車

寛忠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お婆ちゃんの自転車

【Nコード】

N6511Z

【作者名】

寛忠

【あらすじ】

買ったばかりの自転車を盗まれた卓也。当然新しい自転車を買ってもらえず、祖母が使っていた自転車に乗ることに。その矢先、悲しい出来事が起きる。卓也と祖母の自転車にだけ起こる奇跡のお話（処女作です。）

卓也はお婆ちゃんっ子だった。何かしらあるとすぐに祖母に飛び付いてくる。この日もまた・・・。

「お婆ちゃあん、百点取ったよお！」

「はいはい、まあよく頑張ったねえ。ご褒美あげるからね。」

卓也を甘やかす祖母に対し、両親は困っていた。

「お義母さん困りますよ。卓也には私たちからお小遣い渡してますから、あげなくてもいいんですよ。」

「いいんだよ別に。私だっていつまで生きていられるか分からんからね。今のうちにやれることはやっておきたいんだよ。」

祖母は両親の言うことに耳を貸さなかった。毎回のことであり、両親もお手上げだった。

卓也には気に入っているものがある。祖母に買ってもらった自転車である。外に出る時には必ず使っている。

そんなある日、卓也は自転車に乗って少年野球の練習に向かった。

「うわやつべえ！寝坊しちゃったよ。」

この日は集合時間に遅れそうになり、焦っていた。集合時間には何とか間に合ったものの、この時、“あること”を忘れていた。少年野球の練習が終わり、卓也は帰ろうと自転車置き場に向かった。

「あれっ・・・？」

卓也は血の気が引いた。

「そんな、嘘だろ？」

卓也の自転車が、無くなっていた。そして、“あること”していいことに気が付いた。

「どうしよう・・・。」

卓也は自転車から離れる時に鍵を掛けるのを忘れていた。これでは盗まれても文句は言えない。仕方無く、卓也は家路を徒歩で帰った。

「ただいま・・・。」

卓也が弱々しく言つと、母が台所から出てきた。

「あらどうしたの？元氣ないじゃない。」

「自転車・・・盗まれた。」

「ええっ！本当なの？早く交番行かなきゃ！」

卓也と父は交番に向かう前に自転車を置いた球場に向かい、一緒に探した。

「ここには無さそうだな。よしっ、交番に行つて盗難届を出そう。」

卓也は交番で自転車の盗難届を作成した。防犯登録はしているが、警察がこれだけに動くわけではないので、すぐに見付かる保障はない。対応した警察官は卓也に聞いた。

「卓也くん。君は自転車から離れるときに鍵は掛けたのかい？」

「あ、あのそれは・・・。」

「別に怒らないから答えてくれないかな？」

卓也は恥ずかしそうに答えた。

「鍵は、掛けませんでした。」

「お前、それは泥棒に盗んでくださいって言ってるようなもんだろ！馬鹿か。」

「イテッ！」

卓也を叱つたのは父だった。

「まあとにかく、自転車が見付かればすぐに連絡します。」

「お願いします。」

卓也は父に頭を押さえられ、無理やり一礼した。

家に帰り夕飯を済ませると、卓也と両親で今後のことを話した。

「あんた鍵を掛け忘れて盗まれるって情けないわねえ。」

「別にわざと掛け忘れた訳じゃないしさあ。やめてよ。」

「それでだな、お婆ちゃんが使ってた自転車があるから、見付かるまでそれを使つてろ。」

卓也はそれを聞き、嫌がった。

「ええっ！あれ古いし、ギア無いじゃん。絶対嫌だ。新しいの買つてよ。」

「馬鹿言わないの！盗まれた自転車だつてまだ買つて半年ぐらいしか経ってないじゃないのよ。あんたが鍵掛けてりや盗まれずに済んだのよ。こつちも金ある訳じゃないから、そんなにポンポン買つてあげられないわよ。」

母は父を見ながら言った。

「お、おい。俺の稼ぎが悪いみたいない感じで言わないでくれよ・・・。とにかくそう言うことだ。しばらくはお婆ちゃんの自転車でも使つてろ。」

祖母の自転車はゲートボールに行くときによく使つていが、腕を悪くしてからは乗らなくなったので家に置かれている。錆も酷くないのでまだ乗れるが、卓也は乗りたくなかった。そこで唯一の頼りとなる祖母の部屋に向かった。

「お婆ちゃん？」

「卓也かい？自転車盗まれたんだってね。」

「それで、見付からないかも知れないからさ、自転車買つてもいいかなあ？」

卓也は良い返事が出るものと思った。しかし、祖母は眉間を狭めた。

「卓也、そこにお座り。」

「えっ？」

卓也は言われるままに祖母の前に座った。

「今の世の中、お金があれば何でも手に入る時代になったもんだ。だけど他の国ではどうかね。鉛筆やノートすら買えなかったり、ましてや学校にも行けない子供がいるんだよ。当然、そんな子供が自

転車を買えるはずもないさ。」

（うわっ、また始まったよ……）

卓也にとって、祖母のこの説教だけは苦手だった。卓也は聞いている振りをしていた。

「分かったなら、見付かるまでお婆ちゃんの自転車を使いな！分かったね？」

「は、はい……。」

結局、卓也は祖母の自転車を使うことになった。ギアが無いので加速に時間が掛かり、ペダルを漕ぐのにも力がある。

「早く自転車見つかってくれよお。」

卓也の心の叫びも虚しく、時は経つばかりであった。

ある日、卓也が学校からの帰ると、途中で救急車がサイレンをけたたましく鳴らし横を通り過ぎた。救急車が右に曲がった。そこは卓也の家の前を通る道である。その時は卓也は何にも思わなかった。しかし、家に近付くと救急車は明らかに卓也の家の前で止まっていた。卓也が急いで向かうと、祖母が運ばれていた。

「お、お婆ちゃん！」

「お、義母さんしっかりしてください！卓也、家で待ってるのよ！」

母と祖母は救急車で病院に向かった。卓也は祖母の無事を祈った。

夜になり、卓也の両親が帰ってきた。目には涙を浮かべている。

「お婆ちゃん、どうだったの？」

「お婆ちゃんね、亡くなったのよ。」

「ええっ！朝まで元気だったのに。そんな……。」

卓也が学校から帰る時、急に祖母が苦しみ出した。病院へ行き、処置を施したが、息を吹き返すことはなかった。この夜、一家は暗い雰囲気包まれた。

翌日、病院から祖母が帰ってきた。しかし、目を開けることは

二度とない。手を握ると、冷たかった。

「お婆ちゃん、起きてよお……。」

「何言ってるんだよ。死んでるんだから起きるわけないだろ。」

卓也は祖母が死んだことをすんなり受け入れることは出来なかった。もしかしたら自分を驚かそうと寝た振りをしているのではとも思ったが、とてもそのような雰囲気ではなかった。

葬儀を終え、火葬を済ませると、祖母の姿は跡形もなくなった。その後も相変わらず卓也の耳に、盗まれた自転車が見付かったとの連絡はなかった。今日も祖母の自転車に乗って外に出た。しかし、最初の頃に比べ、この自転車の愛着が湧いていた。祖母なき今、卓也にとって、この自転車が祖母そのものと思うようになっていたのである。

（これが変型してお婆ちゃんになったらなあ……なわけないか。）すると、自転車が一瞬光ったかと思うと、どこからか声が聞こえた。

「卓也、卓也。聞こえるかい？」

「その声は、お婆ちゃん？どこ？」

「ここだよ。ここ。お前の目の前にいるじゃないか。」

「いないよお。目の前には自転車だけ……まさか！」

卓也は自転車を見て思った。

「自転車にいるの？」

「やっと気付いたようだねえ。私はここでお前を見てたんだよ。」

「お婆ちゃん！」

卓也は自転車に抱き締めた。

「これこれ。周りが不思議がつているよ。」

「あつ……。僕にしか聞こえないんだよね。」

周囲には自転車の独り言を話したり抱き着く変な子供としか思われていなかった。

「でもどうして自転車なんかに移ったの？」

「お前の事が心配だったんだよ。だから神様に、卓也の側にいさせ

てくださいとお願いしたら、この自転車に魂が移ったって訳さ。」

「そうなんだ。またお婆ちゃんと話出来て嬉しいよ。」

「そう言ってもらえると、お婆ちゃんも卓也と話がまた出来て嬉しいよ。でもこの自転車、私が乗ってた頃より動きが悪くなっちまったねえ。油を差さないと硬まっちゃうから、お願いしておくれ。」

「うん。」

卓也は自転車に乗り、家に帰った。

「お婆ちゃん、重たくない？」

「大丈夫だよ。これぐらい何ともないさ！」

油を差した自転車は、盗まれた自転車には及ばないものの動きが良くなった。

「お婆ちゃん、どお？」

「何か若返った感じだねえ。まだ三十年は頑張れるかも知れないよ。」

「そんなこと言わないで百年頑張つてよお。」

それから卓也は、学校に行く前と帰った後には自転車に挨拶した。

「お婆ちゃん行つてきまあす！」

「お婆ちゃんただいまあ！」

また、学校から帰ると、自転車に乗って外に出ることが多くなった。その度に祖母は卓也の住む街の昔の姿を教えていた。

「ここは今でこそ綺麗な公園になっているが、昔は軍需工場でな、戦争に使う爆弾や武器を作っておったんだよ。」

「へえ。お婆ちゃん、詳しいんだね。」

「そりやお前より長く生きてたんだからね。昔のことはよく分かるんだよ。今のことは・・・さっぱり分かんのお。」

「今のことは僕が教えてあげるよ。」

卓也の両親は、卓也が自転車に乗る時間が増えたことを不思議に思っていた。

「お前、最近あの自転車に乗るようになったけど、どうかしたの？」

「あの自転車に乗っていると、お婆ちゃんと一緒にいる気がするんだよね。」

「やっぱりお前、変だぞ。」

卓也の口から“あの自転車にお婆ちゃんの魂が乗り移った”と言えるはずはなかった。それを言った時点で信じてもらえない。

卓也が祖母の自転車に乗る日々は長く続いた。その時だけ卓也は祖母と話ができる。卓也はこの時が一番の幸せだった。卓也はもっと長く祖母と一緒にいたいと思った。祖母も卓也と長くいられたらと思ったが、祖母には考えがあった。

そんなある日、一本の電話が鳴った。

「はいもしもし。警察ですか？・・・ええ、そうですが・・・えっ！卓也ですか？卓也が何かやらかしたんですか？」

電話に出た母は一瞬、卓也を睨んだ。卓也は驚いた。

（えっ？何だよ。悪いことなんかしてないよ！）

「ああ、そうなんですか？見付かったんですね。ありがとうございます！はい、取りに行きます。」

母は受話器を戻すと、表情を緩めた。

「卓也、自転車見付かったよ！」

「ええっ本当に！行こっ行こっ！」

卓也と母は盗まれていた自転車を受け取りに交番に行った。その時、卓也は祖母の自転車に見向きもしなかった。

家に戻り、自転車を車から下ろした卓也の表情は晴れやかだった。

「ちよつと走ってくるね！」

「ああ、気を付けるのよ！」

卓也は戻ってきた自転車を乗り回した。

「やっぱり、この自転車の方がいいや！ヤッホーイ！」

卓也は満足そうに自転車を持って家に入った。

「もう無くしたりしないからね……。」

卓也の視線の先には、祖母の自転車があった。

「お、おば、お婆ちゃん！こ、これはね、違うんだよ。」

「いいんだよ。自転車が見付かって良かったねえ！」

卓也は必死で祖母の自転車を庇った。

「で、でも僕まだお婆ちゃんの自転車に乗ってたいんだ。こっちは・
・使わないからいいよ。」

「無理をしなくてもいいんだよ。私はお前と一緒にいられて、嬉しかったよ。」

「ってことは、もしかして……。」

「そう、天国へ帰らないといけない時が来たのさ。」

卓也は祖母の自転車にしがみついた。

「嫌だ！嫌だよお！僕、お婆ちゃんともつと一緒にいたいんだよお。せつかくこうしてまた会えたのに。離れたくないんだよお。」

「それは私も同じだよ。」

「だったら、このまま自転車に続ければいいじゃないか！」

「卓也！別れというものは生きている以上は避けて通れんものなのさ。木や花だっていつかは枯れてしまう。それと同じなんだよ。」

「でも……僕のこと心配じゃないのかよ。」

「大丈夫。卓也は立派な大人になる！いつまでも弱虫でどうするんだい！私はお前の泣く顔など見たくないよ。」

「でも……でも……。」

卓也は今にも泣き出しそうだった。

「なあに、不安になることはない。さよならは言わないよ。私はまた別の形で、お前を見守るからね。」

「うん……。」

その時、自転車が光った。

「そろそろ、お迎えが来たみたいだ。それじゃ卓也。元気でいるんだよ。ホホホホ……。」

祖母の自転車からだんだんと光が薄くなり、消えた。

「お婆ちゃん？お婆ちゃん？」

自転車から返事はない。祖母の魂は自転車から抜けてしまったのである。卓也は自転車に抱き着いて泣いた。その様子を、母は不思議そうに見詰めていた。

（さつきから自転車に話したり抱き着いたり泣いたりって、何考えてるのかしら。この子の頭の中かち割って見てみたいわ！）

それから卓也は、戻ってきた自転車に乗るようになった。祖母の自転車は置かれたままだが、卓也が自転車に挨拶することは止めなかった。祖母の魂が抜けた後も、卓也には祖母がまだ自転車にいるような気がしたからである。

数日後、卓也の家に一匹の子猫が来るようになった。

「あら、かわいい猫ちゃんだねえ。よく来るけど、どこの子かな？」

家族は猫好きだったこともあり、度々来るその子猫をかわいかった。

「なあ、こいつに名前でも付けるか。」

「そうねえ、何がいいかしら。」

卓也は、既に子猫の名前を決めていた。

「じゃあ、キ又ちゃんはどう？」

「何その名前。今つぽくないじゃないのよ」

「お前それ、婆ちゃんの名前から取っただろ。どこまで婆ちゃんっ子なんだお前は！」

子猫は祖母の名前から取ってキ又ちゃんと名付けられた。しかし、このキ又ちゃんが祖母の生まれ変わりだとは、卓也含めて誰も知らない。

（卓也、元気でいるんだよ……。）

「んっ？今お婆あちゃんの声が……まさか。いや、いくらなんでもそりゃないか！」

卓也には祖母の声が聞こえた気がした。

(終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6511z/>

お婆ちゃんの自転車

2011年12月21日22時51分発行